

浦ノ内中学校校内研修

8月7日（水）に浦ノ内中学校の校内研修に、講師として呼んでいただきました。内容は「心理的安全性と個別最適な学び」です。

「個別最適な学び」「複線型の授業」という言葉を最近よく聞くようになりました。これらを実現することは、子どもたちの主体性を育むことにもつながり、変化の激しいこれからの社会を生き抜いていくうえで大切なことだと思います。しかし、「個別最適な学び」も「複線型の授業」も学習方法の一つでしかありません。ここにとらわれて、授業のやり方だけを変えてもうまくいくものではないということは、私も実践を通して実感しました。いくら「分からなければ仲間や先生に聞いてもいいよ」と伝えても、そもそも「分からない」と言える人間関係（学級の雰囲気）でなければ助けは求められないのです。一見学びあっているように見えても、その実、取り残されている生徒がいたり、馴れあっているだけだったりします。

そこで、大切だと考えたのが、さざなみ第1号でもご紹介いたしました「心理的安全性」です。「分からない」と自分から言えない生徒を目の当たりにしたとき、私も「この子に助けを求める力をつけなくては…!」と思っていました。しかし、実際は「その子が助けを求められる学級の雰囲気をつくる」ことが大切だということに気がきました。

心理的安全性を確保するためには、何でも言いあえる話しやすい雰囲気が欠かせません。話しやすい雰囲気をつくるには、良い聞き手の存在が大切だと思います。校内研修の中でも、非常にシンプルな「話を聴きあう活動」（ソーシャルスキルトレーニング+構成的グループエンカウンター）を取り入れました。こういった活動は特效薬ではないので、1回やったから雰囲気が変わるというものではありませんが、子どもたちにとってはゲーム感覚で取り組みやすく、先生にとっても短時間でできるので取り組みやすいのではないかと思います。



拙い話で、うまく伝わらなかった部分もあったかと思いますが、私が研究の一環として昨年度取り組んだことや、これから取り組んでいくことを言語化してアウトプットする場をいただいたことで、整理することができました。

2学期の授業

44日間という長い夏休みの期間を経て、1学期の続きから授業を再開しました。意外にも子どもたちは単元計画シートの使い方や授業の進め方についても覚えていたようで、まるでつい先日まで授業をしていたかのようにスムーズに授業に入ることができました。



この日の学習内容は1次関数の変化の割合についてでした。前回の授業で明らかになった課題を受けて、いくつか工夫をして授業に臨みました。

- ・課題の配布をロイロノートからスプレッドシートに一本化した。(時間確保のため)
- ・最初に全体で丁寧に課題を共有し、取り組み始めの足並みをそろえた。
- ・ノートづくりの例を、参考資料として見られるようにした。(見通しをもちやすくするため)

ノートづくりの例を生徒に示すのは、複式でリーダー学習をしている小学校の先生が、あらかじめ黒板やホワイトボードに活動や問題の流れ(シラバス)を示しているのを参考にしました。多くの生徒が、ノートづくりの例を参考にしながら取り組んでおり、以前と比べると「何をすればよいか分からない」という生徒は少なかった印象でした。進度は様々で、最後まで終わった生徒もいれば、最初の問題でつまづいてしまった生徒もいましたが、諦めずに最後まで考えようとしていました。課題は以下の通りです。

- ・教師による説明の部分でも生徒に考えさせるように時間を取った結果、想定以上に時間がかかってしまい、学び合いの時間が少なくなりました。
- ・全体への説明の後、生徒が取り組む問題に必然性を持たせる繋ぎの説明が口頭だけになり、黒板に残っていなかった。
- ・(参観者より教科に関して)変化の割合が何を表しているかという定義をもう少し丁寧に扱ったほうが良かった。

一斉指導でもそうでしたが、時間設定や場面設定は非常に大切な要素になります。今回10分を予定していた前半部分に15分かかってしまったので、次回からはもう少しコンパクトにまとめたいと思います。(説明をもっとシンプルにする、課題を事前に配布して考えておいてもらう等)

板書計画についても、生徒の思考を促すものになっているのか改めて計画をし直そうと思います。いただいたご指摘の点についても、詳しい説明はノートの例の方には書いていたのですが、授業内では口頭のみでの確認になってしまっていたので、何を残すのか、何を生徒自身に見つけてもらうのかをはっきりさせて授業に臨みたいと思います。